ビーグ再発見!!

れたビーグを乾燥させるのに適した条件を備えている照間集落に南風原集落から生産地を移し、そこでビーグの栽培を始めるようになりました。

照間集落の田んぼは農薬を使っていません。そのため、田んぼやため池には小動物が生息しており、サギ科等の鳥はそのエサを求めてやってきます。

◆ムスル

むしろ、畳表（たたみおもて）のこと。ビーグの茎を織り合わせて作ったもので、畳の表面に縫いつけるもの。

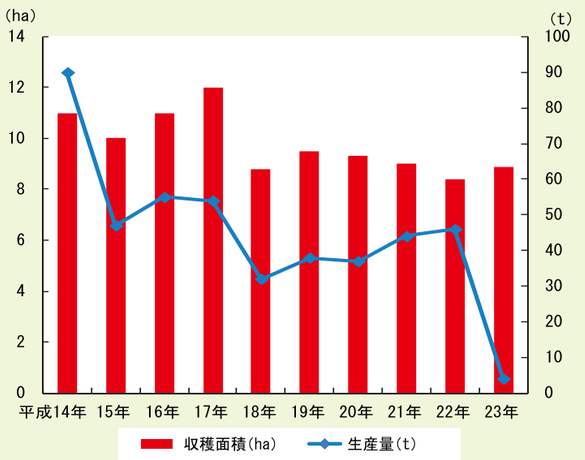
◆畳床（たたみどこ）

ムスルを張る畳の芯のこと。

◆畳縁（たたみへり）

畳のへり。また、そのへりにつける装飾の布。

沖縄県いぐさ生産量の推移



（沖縄県 糖業農産課　市町村報告より）

沖縄県におけるビーグの収穫の面積と生産量は、年々減少しています。2010（平成22）年の生産量は46トンです。収穫の面積は8.4ヘクタールで、そのうち8ヘクタールはうるま市が占めています。このことから、照間は、県内最大の収穫の面積ということがわかります。※平成23年は台風被害により収穫減

総合学習や生涯学習へのとりくみ

うるま市の資料館では、地域の自然、文化、歴史を調べ、その資料を学校教育や生涯学習へ活用しています。また、学芸員が総合的な学習の時間で地域の再発見に関わり、子どもたちが自然、文化、歴史をもとに産業や観光などをさぐる学習を展開しています。

★資料館で道具を見てみませんか？
★地域で調べてみませんか？

平成24年度景観調査活用事業

うるま市立海の文化資料館
〒904-2427 沖縄県うるま市与那城屋平4番地（2階）
TEL：098-978-8831　FAX：098-978-8841

うるま市文化財シリーズ⑨

照間のビーグ

いぐさのことを
方言で「ビーグ」といいます。
現在、うるま市い草生産組合の
組合員数は32名ですが、
実際にビーグを生産している方は28名です。
その理由は、
ビーグ農家のお年寄りが増え、
後継者が少なくなって
いるからです。

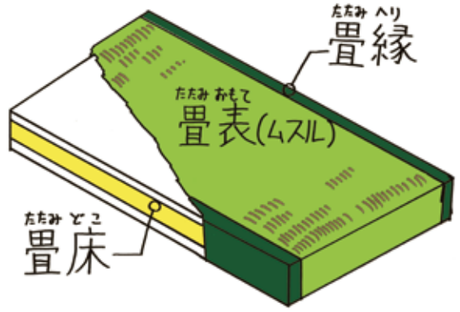
うるま市教育委員会

照間のビー

照間集落では、150年～200年前にビーグ栽培が始まったといわれています。

元々ビーグ栽培はうるま市南風原集落で行われ、収穫されたビーグを乾燥させるのに適した照間浜で天日干ししていました。当時の照間浜は野球ができるほど広く、夏は強い日差しで温められ、裸足で歩くことができないくらい熱かったようです。そのため、収穫さ

◆畳用語



ビーグから畳ができあがるまで

うるま市文化財シリーズ⑨

① 植付（10月ごろ）

ビーグは10～11月に苗を植えつけます。ビーグの田んぼに浮いている草が多くなると、そのつど、カマなどの道具を使って草取りをします。ビーグを傷つけると成長が止まってしまう恐れがあるため、田んぼに入るのは必要最小限にします。

ビーグの田んぼは在来の生き物が多く見られます。その生き物はビーグにとりまく害虫や外来種などを食べ、ビーグの育成の手助けをしています。

② 収穫（6月ごろ）

★ビーグは6～7月に刈り取りします。

③ 乾燥機

収穫したビーグは乾燥機で乾燥させます。天日干しでは5～7日かかるところを、乾燥機を使用すると約12時間でしあがります。乾燥機では一度にムスル100枚分を乾燥させることができます。

④ 織る

▲アカヤーマー

◀機械の織り機

ビーグの品質は、特級、1級、2級、3級に分かれます。その選別には選抜機を使い、ビーグの長さに応じて分けています。より分けたビーグでムスルを織ります。ビーグの長さによって使用する機械も変わります。現在はすべて機械の織機を使って織りますが、昔は足踏式の織機が使われていました。それは、アカヤーマーやキーヤーマーと呼ばれています。

⑤ 畳屋で完成

照間で作られているムスルの多くは、県内の畳屋が畳をつくり県内の住宅等で使われています。

畳職人は、部屋の大きさにあわせて、畳の大きさを自由自在にしあげます。職人の技がすごい！！

照間のビーグは沖縄県最大の生産量があり、品質も高く評価されています。しかし、生産者の高齢化や後継者不足が進み、とても厳しい状況です。さらに田んぼが宅地化されつつあり、生産の面積も減少しています。